はじめに

ここにお届けする『農耕世界と遊牧世界の接点―アジア史研究の新たな史料と視点―』（『調査研究報告』No. 57）は，2010～2011年度の学習院大学東洋文化研究所一般研究プロジェクト「「農牧接壌地域」における民族と社会」（代表研究員・高柳信夫）の研究成果である。

このプロジェクトは，ユーラシア北方の遊牧民と南方の農耕定住民がせめぎ合い，多様な民族集団が流入し，衝突と融合が繰り返されてきた境界世界について，現地での文献調査やフィールドワークによって入手した各種資料にもとづき，この地域の社会像とその変遷を具体的に解明することを目標としたものである。その一環として，2年の間に，カザフスタン・ウズベキスタン・キルギスにおいて共同調査を行い，文献のみではうかがい知れない多くの貴重な情報を手にすることができた。詳しい活動記録については，『学習院大学東洋文化研究所所報』［2011年度版］と［2012年度版］を参照されたい。

もちろん，このプロジェクトにおいて掲げた大きな目標は，到底2年の活動期間で完全に達成しうるものではないが，今回，その第一歩として，プロジェクトメンバーおよび当該分野の研究者による3本の論考を収録した。なお，執筆者の一人であるDavid Brophy氏は，学習院大学東洋文化研究所が実施した2009年度学習院大学新規重点施策「東アジア〈未来知〉共創教育研究拠点の形成」における招聘研究者である。

それぞれの論考の扱う時代と地域は，遼金元代の山西省北部，18世紀中葉の新疆トルファン，20世紀前半のソ連領トルキスタンと様々であり，この『調査研究報告』は，いわば「点」の集合にすぎないとも言いうるが，今後さらに調査・研究を進め，「平面」や「立体」を構成しうるような，多様で充実した成果を発表してゆければと考える。

最後に，2年間にわたり，中央アジア各地への現地調査という得がたい機会を与えていただいた学習院大学東洋文化研究所に対して，改めて謝意を表する。

高柳信夫

2012年4月